

# 現代社会にも必要不可欠な場

時には学問的な探求を試み、時には政治的実践について語り合う

金子宗徳

前田勉善

## 江戸の読書会

会読の思想史

「ニア」の翻訳書である『解体新書』の刊行もまた、かうした「大人の遊び」に位置づけられてゐる。また、それは異なる見解を抱く「他者」と出会い、切磋琢磨する場でもあつた。

かれこれ七年あまり、大「読」といふ語じたいは『福音自伝』で目にしてゐた学院の後輩たちと近代日本が、先生の前で外国语のテキストを解釈し、その拙さを評価される形式のことだかりとして思想家なり文学が評ひ込んでおり、素読や講釈との違ひを深く意識して、各人の「読み」に基づいて議論を交はし、その中身に関連させる形で次のテキストと発表担当者とを定め。議論の流れ次第で日本本によれば、テキストを丸暗記させる素読、テキストを先生が解説する講読むことのできない様々な著作に触れることが出来た。夕暮れ時になると、益々手に政談から廻談までを片手に政談から廻談まで他愛もない会話を楽しむ。正直云つて、こちらの方がメイクかもしれない。

このやうな讀書会は西歐のサロン文化に端を発するが、後者は「大人の遊び」といふ側面が強かつたといふ。これなど、私自身の経験からしても頗る印象的である。朱子学の影響によれば、江戸時代の我々は「会読」といふ共読書の方法があつた。会だ。前野良沢や杉田玄白による「ターヘル・アナト

は不可能である。そもそも、上級武士の子弟であれば凡庸であつても相応の役職に就くことができ、下級武士の子弟であれば学問を重ねても出世の機会がないな

テキストについて講義や討論を繰り返す「讀する会読」がれるだらう。

(=輪講)と対等な参加者たちが自由に討論する「読む会読」とが存在したが、後者は「大人の遊び」と変貌していく。個人的に興味を覚えたのは、水戸藩の例である。朱子学の影響を色濃く受け、独自の国体論を生み出した水戸学には、NPOなど市民の自發的活動の必要性が語られる今

日、時には学問的な探求を試み、時には政治的実践について熱く語り合ふ場は必要不可欠だらう。成熟した

現代社会における「大人の遊び」を考へる上でも興味深い一書であった。(かねこ・むねのり氏)里見日本文化研究所主任研究員。

近代理日本政治思想史専攻

知能教育大学教授・日本思想史専攻。東北大学大学院博士後期課程単位取得退学。著書に「近世神道と国学」など。一九五六

江戸の  
読書会

前田勉善



読書会が明治維新を標榜した  
江戸の「会読」の歴史

四六判・392頁・3360円  
平凡社

978-4-582-84232-6

★まだ・つむ氏は愛

知能教育大学教授・日本思

想史専攻。東北大学大学

院博士後期課程単位取得

退学。著書に「近世神道

と国学」など。一九五六

(昭和31)年生。

いふ印象があり、水平的な性質を有する会読とは結びつかなかつたのだが、後期につかなかつたのだが、後期水戸学の起点に位置づけられた藤田幽谷は彰善館の仲間たちと積極的に会読を行つてゐた。ある時、幽谷は予習することなく会読を行ひ、聞くだけと云ひながら講者の見解を批判して自己説を滔々と述べたと伝へられる。また、後に藩主となつた者昭は、江戸の水戸藩邸で会読を行つてゐたといふ。さういふに、首昭は言路洞開しかし、本書でも指摘されてゐる通り、「会読の場」は「正味の実力」、「実績」を原理とするだけに、そこには当然、「属性」を原理とする身分制度との間に対立・衝突が生まれる。こうした水戸の氣風を受け継いだ吉田松陰は、獄中に「孟子」を読み、国家的危機にあつて自らは何を為すべきか自問自答しつゝ、「講益塾」では美力主義を貫徹でき、藩校では同様のことだが、藩校では同様のことに対しても輪講の形式で「孟子」を読み、国家的危機にあつて自らは何を為すべきか自問自答しつゝ、「講益塾」をまとめ上げる。このやうな会読といふスタイルは、明治初期に歐米流の教育法が導入されたことで公教育から姿を消したが、藩校へと受け継がれた。余話」をまとめあげる。